

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

秋号
17年9月
No.48

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル カトリック会館7F
発行人／大塚喜直
TEL&FAX075-223-2291 E-mail: bukatsu@kyoto.catholic.jp
Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp/bukatsu/>

ことばは、場で芽生え、人びとに宿る

阿部 寛（京都社会福祉士会）

1. はじめに

不思議な魅力に導かれて訪問し、ついには移り住んでしまった場所がいくつかある。例えば、横浜の寄せ場「寿町」、厚木の被差別部落、そしていま住んでいる京都。

異質な者同士が出会えば、はっとする出会いもあれば、すれ違いや対立も起きる。ことばが行き交い、すぐには答えの出ない事態に耐えながら、それぞれの悩み・苦労、経験知と技が語り出される場が生まれていく。そして場が次第に発酵し、熟成しながら、新たなことばが芽生え、人びとに宿っていく。そんな学びほぐしと生き直しのプロセスとダイナミズムに何度か立ち会うことができた。その一端をお話したいと思う。

2. 横浜「寿町」とたまり場活動

1984年、犯罪学を研究する大学院生であった私は、横浜日雇労働者連続殺傷事件（1982年～83年、15～6歳の少年たちが野宿生活者を襲撃し、3人が死亡し重軽傷者多数）を調査研究するため「寿町」を訪れた。そこでは、識字学校、日雇労働者組合、共同保育、不登校の子どもたちの居場所、移住労働者の支援会、アルコール依存症者の自助グループ（AA）等、互いを支え合う独自の活動が展開していた。

最も私を惹きつけたのは寿識字学校だった。日雇労働者や在日朝鮮人1世のオモニたちが語り、綴ることばは、その人の苦労の歴史と文化を背景として、圧倒的存在感にあふれていた。一方、私のことばは、抽象的で生活感覚に乏しく、読むはしから消えてしまうようなところもとないものだった。「自分のことばが欲しい」と心底思い、必死で通い続けた。あるとき、識字を主宰する大沢敏郎さんから「阿部さん、ふるさとのことばで書いてみないか」と提案された。いざ取り組んでみると、かなり難しい。わがふるさとの新庄弁（山形県新庄市）は、共通語とは異質なことばで、独特の発音とイントネーションがある。やっとの思いで書き上げた文章は、夏祭り（山車祭り）のこと、父母きょうだいのこと、友だちのこと等、私にとってかけがえのないことがらだった。

振り返れば、18歳で上京してから、東北・山形への差別的なまなざしを受け、それを自らも身体化し、コンプレックスと自己否定の感覚にさいなまれた。さらに大急ぎの時間感覚、人と人の関係や自然環境の激変、熾烈な競争も伴い、20歳代前半は心身ともに絶不調となった。その苦しみの象徴でもあり、同時に私を育んでもくれた新庄弁によって、私の体の奥深くに眠っていた豊かなもの、根源的なものが息を吹き返した。

1985年5月、殺傷事件をきっかけとして、出会いと学びと生活の場「たまり場ユンターク」が誕生した。私は、日雇労働をしながら住み込みの管理人となった。7年に及ぶたまり場活動の中で忘れがたい人びとがいる。その一人が、清明さんだ。1930年後半、脳性小児まひで生まれ、10代後半から福岡県内の精神病院に強制収容された経験を持つ。病院内では電パチやロボットミーが横行し、3度目の脱走で横浜へ逃れてきた。彼からは、数限りない親切と恩義を受け、自由奔放な生活から生きる知恵と技を学んだ。子どもたちからは、「臭い、風呂に入って来い」と非難されながら、不思議と愛され続けた。確かあれば、解放教育をめぐる教師たちが激しく批判し合う場面だったと思うが、参加していた彼が、「自分が正しいと思った時、ダメな人間になっていると思うのよ」と、独り言のようにつぶやいた。辛酸の限りをなめ尽くした彼の人生体験がもたらしたことばは、私の宝物となり、いまもよみがえる。

3. 部落解放運動、精神障害者の生活支援、そして学びの場

日雇労働を4年ほど続けたあと、縁あって部落解放同盟神奈川県連合会の職員となった。当初は県連横浜事務所で働き、間もなく厚木の被差別部落に引っ越し、以来20年ほど部落解放・人権活動に取り組んだ。活動の柱が、ムラの子どもの勉強会から端を発した地域人権学習会「ぼちぼち」と精神障害を抱える女性たちの活動拠点「コミュニティ・スペース「アジール」」で、現在も続いている。

良子さんは、「ぼちぼち」設立メンバーの一人で16歳のときアジールのメンバーともなった。小学生のときからいじめを受け、学校に通うことも困難であった彼女は、「ぼちぼち」と「アジール」で大切な仲間を得た。文字の読み書きに苦勞していた彼女が、「ぼちぼち」の識字の時間に、「学校」についてのイメージを1行で表現し、読み上げた。「まだまだ長く、机やいすや床がついてくる」。その場に深い沈黙と感動が生まれた。心の底に深く沈めていた学校への思いが、痛ましいほどに鮮烈に表現された1行だった。以来、仲間たちも良子さんのことばを心待ちにし、仲間たちも胸に秘めてきた体験や思いにことばを与えていった。次第に、精神障害者、不登校経験者、ベトナム難民、ブラジル移民経験者などが学習仲間に加わり、識字、グループミーティング、人権学習を柱に、「自分自身を教科書に」、「安心できる居場所と語りによる回復」をモットーとした、当事者主体の学習活動となっていった。

4. 受刑経験者のグループミーティングと生存戦略

60歳を転機に、これまでの活動に一旦区切りをつけ、京都に転居した。ソーシャルワーカーとして成年後見活動等をしながら、刑務所出所者の生活支援に取り組んでいる。そのきっかけは、刑務所出所者の支援活動をしているNPO法人マザーハウス（五十嵐弘志理事長）から、京都刑務所から出所したKさんとその支援者の宮下さん（河原町教会信徒）のスーパーバイズを依頼されたことだった。

Kさんは、幼少期からすさまじい暴力を受け、自分の感情や意見を表明することが許されない状況で、沈黙を続けることが生き残りの方法だったという。中学に通えず、少年院で卒業証書をもった彼が「仲間と勉強したい」と、心の底から訴えた。こうして、グループミーティング「陽だまりカフェ」が誕生した。毎月1回、カトリック河原町教会の1室をお借りして開催しているが、受刑経験を持つ人、セクシャル・マイノリティの人、生き直しをしようとする人等7～8人が参加している。「最近良かったこと、悩んだり苦労したこと」を語り、識字や当事者研究の方法を用いながら、これまでの歩みを振り返り、これからを構想する。これまでマイナスと評価され、自身もそう思いこんできた自分自身の人生が、実は頼り、支えるべき依存先が極めて少ない状況を必死で生き、独自の知恵と技を編み出していたことに気づき、分かち合っている。ミーティングは、いつも真剣さの中にも笑いが絶えない。依存症者の回復プログラムや生存戦略、精神障害者や発達障害者の当事者研究等、最近の目覚ましい先行研究と実践に学びながら、「犯罪」や薬物との深い関係から自らを解き放ち、自分自身と仲間の力を信じて、新たな人生を切り拓こうとしている。

私はここにおります

奥村 豊 様（京都教区司祭）

名前を打ち込むと5つくらいの候補が出てきて「奥村様」というのがあったので、そこをフルネームにしてみた。お前はなに様だという声が聞こえ、身分をわきまえぬ不届き者と思われそうだがこのままにしておく。Wordの顔を立てたらこうなってしまったのだから仕方がない。

子どもはそんな風に顔を立てたりはしない。王様の顔を立てて「王様、素晴らしいお召し物でございます。」などとは言わない。見たまま「王様は裸だ。」というのだ。しかし



この時子どもは「自分は子どもの身分である故、このように言わなければならない。」と思って「王様は裸だ。」と言ったのではなかろう。もちろん無礼なことを言っているという自覚もなかろう。勇気も必要なかっただろう。ただ見たまをそのまま口にただけなのだ。私は野党の人間だから、私は正平協のメンバーだから、私はリベラル派だから、私は保守派だから、私はカトリック教会

の信者だからという思いが心に上った瞬間「王様、素晴らしいお召し物でございます。」が口をついて出てしまう。使徒たちの間に分け入って、無礼にもイエスに近付こうとする子どもにならないければ、天の国に入ることはできない。子どもは無礼にもそして親切に「イエスさん、チャック開いてんで。」と言い、イエスは「おおきに、兄弟。うわー、かつこ悪っ。」と言う。天の国が実現した瞬間だ。チャックが昔からあったかどうかはこの際問題ではない。

イエスがもし、自分は大工に過ぎないので宗教的権威者の前で思ったことを口にしなかったらどうか。自分はユダヤ人なのでという理由で最後まで異邦人を相手にしなかったらどうか。恐らく貧しくとも平穏な生涯を送っていたに違いない。自らもあの子どものように、見たことをそのまま言葉にし、分別することなく近づきたい者に近付いて行ったが故に、見たことを見なかったことにする分別ある権威者に殺害されたのである。分別ある大人の立場ではなく、無分別な子どもの立場で世に相對した。いや、その立場さえ捨てたといっている。人々が神の立場と理解しているその座から降りて、「ただあること」の峻厳さの中に神の存在を現したと言っているかもしれない。

「ただあること」の困難さによって人は自己の社会的属性に依存する。やがてその属性によって自己が支配されることになる。例えば「自分は教師である」という意識が「教師でなければ生きていけない」に変化すると、教師という身分からしかものを見なくなるし考えなくなる。ある種の職業的危機に陥った時、教師であることを利用して自己の安全を確保するようになる。子どもから思わぬ批判を受け、それが真つ当な批判であるにもかかわらず、自分が教師であることに執着するあまりその子どもを理不尽に叱責する。自分は大臣でなければ生きていけないと思うと、その職務の手抜かりを部下のせいにする。過ちがあれば認めてやり直せばいいのだけれど、生きているのが「ただある私」ではないのでこれがなかなか上手くいかないのだ。大方のことは自己の社会的属性を一旦横に置いておけば見えてくるはずだ。子どもが「王様は裸だ。」と言えたように。

私たち人間は自分の頭で考えるのが面倒なので、立場や身分（社会的属性）が自動的に与えてくれる思想や論理を自分のものとして振舞う。そうした方が世間の受けがいいのだ。宗教者はかくあるべきだと言われると、「そんなんじゃないだよな、俺。」と思っている、それらしく振舞うことが平和なのだ。これが神の平和でないことは分かっている、なかなか困難な道は通りたくないものだ。男とはこういうものだ、女とはこういうものだというのに素直にフィットできる人はいいのだが、そうでない人にとっては「そんなんじゃないよね、私。」と言いたいとがなかなか言えない。神は人間を男と女につくられたとしよう。しかし、男はこう振舞え、女はこうあるべきだという詳細まで規定してはいないだろう。

日本人は和服を着るものだとか、パン屋ではなく和菓子屋に足を運ぶ必要があるなどという人多くの人々は笑うだろう。それはもはや洋服もパン屋も日本の文化であると理解されているからだろう。むしろこのように外から入ってきた文化を自国の文化として発展させていくことができる風土こそ日本の偉大さである。私、もしかして真正の国粋主義者かもしれない。しかし国粋主義者だからといって日本人であることに依存してものを見ることは、過ちにおちいる危険を冒すことになる。

何国人かということは相当強烈な属性である。にもかかわらずその中でもどこで生まれたか、家の血筋はといったことを理由に、具体的にそこにある人間をそのまま見ようとしなないことがあるとしたら、天の国・神の国はまだ遠い。

初対面で必ず訊かれるのは「どちらのご出身ですか？」である。悪意は毛頭ないであろうから素直に「愛知県西春日井郡師勝町である。」と答えていたが、面倒なので最近では「名古屋の近くです」ということも多い。こういう場合、相手は自分の持っている名古屋の知識を矢継ぎ早に提示し続ける。私は確かに生まれはそのあたりなのだが、物心つかぬ間に神奈川の二宮町に引っ越したので、名古屋のことはほぼ何も知らないのだ。多くの方は、人間が生まれるとそこで育つてその地域の文化を身に着けていると早合点してくれる。だから、面倒だけれど、「父親は熊本、母親は北九州、訳あって長男と三

人で名古屋に引っ越しそこで次男の私が生まれたのである。」と先に説明する。そんなに私の生まれ素性を知りたいのだろうか。もちろん会話のきっかけをつくることが主眼なのだろうが。いくらそんなものを知っても、付き合ってみないと私のことは分からないでしょ。

また、教会以外のところで知り合った人との間では、私が教会の神父だと知ったとたんに何やら態度が変わってしまう方が多い。丁重な態度に変わる人もいるし、突然攻撃的になる人もいる。どちらにしても差別されていると感じる。居酒屋の親父たちや女将たちはほぼただの客として扱ってくれる。「奥村さん」「奥ちゃん」。だからやおら訪問するのだ。教会にあまりいないのは、居心地が悪いのだろう。教会を居酒屋のようにしなければならない。半分冗談、半分本気だ。イエスはたいそう居心地が悪かったに違いない。大工の息子なのとか、マリアの子とか。弟子からは何かと持ち上げれるし。「俺の話聞いとんのんか！」と言いたくなるのも分かる。

大工の息子であること、マリアの子であること、先生であることはさて置き、そこにいる人間を、起こっている出来事を、まず見つめる視点としてのみ自分を設定する。そしてこれらに対して自分の身分・立場からではなく、真理である神からのメディアとしてその言葉を伝えることでアプローチする。かなりストイックだけど、ラディカルに熱い。人間が神の前に豊かであるということは、この姿勢を獲得することなのだろう。

神が私の名を呼ぶ。「はい、私はここにおります。」 Yes, I'm here. 「私は、ここです。」

「私はある」という方が、「私はここにある」を呼び出した。この「ここ」が私の正体だ。これに余分なものをくっつけてものを見る時、人を見る時、つまり身分・立場から理解しようとする時、誤ってしまうのではなからうか。我々が神の似姿というのは、「私はある」から指示された「ここにある」の意味ではないだろうか。

Wordの指し示す奥村豊様の様はやはり余分だ。勝手に削除してください。

えっ、これ聖書の話だっけ。勝手に訂正して楽しんでください。

島と生きる

マグダレナ三千代（イエスの小さい姉妹の友愛会）

この総合テーマで5月19日～21日に開かれたハンセン病市民学会第13回総会交流集会 in 香川 岡山は若い人たちの濃やかな心遣いとイニシアティブがまぶしく感じられました。

まず、坂出の駅を出ると尋ねる必要もなく、四国医療専門学校の生徒さんたちがひと目で分かるように、お揃いのTシャツを着て道案内に立ってくれました。その心遣いは翌日の岡山での総会交流会の時も同じでした。

香川県の大島青松園、岡山県の長島愛生園、邑久光明園の瀬戸内三園、そこで生きざるを得なかった人と若い人たちの出会いは「未来に向けて私たちができること～思いを繋ぐ」、「私たちの未来へ のこす、つなぐ、むすぶ」「大島の未来を自分たちの問題として考える」という未来への結実になっていると感じさせられました。さらにはマイナスイメージを大逆転させる「大島ラブストーリーをつくろう」というパワーポイント、療養所内の教会で結婚式を！という中学生の感性には脱帽!!

今回の集いで印象的だったのは数人の方の出会いが非常に幼いころから始まっていたということ。お母さんに連れられて幼稚園の時から大島に通い始めたという男子高校生。今日は出席できないお姉ちゃんを作ったというパワーポイントを使っての真摯な分かち合いを聴きながら山本さんと出逢って、陶芸を習うことを通して、“社会”と出会う黎明期に大島に通ったことは、この人の柔らかな心に人生の基層として刻まれているのではと思われました。

もう一人の方は、ピアニストで歌手の沢知恵さん。お父さんが神学生だったころ大島に通い、後に牧師となり、結婚されて、生まれた沢さんを連れて大島を訪ねたのが、赤ちゃんだった沢さんにとっての最初の出会い。「もちろん、抱かれたことは、覚えてないんです。でも長じて自分で訪ねて行ったときに、いろんな方から『おお！あんたが、あん時の赤ちゃんか！』と言われました」。自分の子を持つことを許されなかった人たちにとって、里帰りするように、生まれた子を連れて会いに来ることは、“あなたは私のかげがえのない人です！”という何よりの証しであつたでしょう。

翌日、岡山での交流会では、山陽女子高校（岡山市）の生徒さんたちが、今年の3月15日に永眠された玉城シゲさんの屈辱に満ちた体験を上演しました。6ヵ月になっていた赤ん坊を引きずり出されて殺された体験を上演するために、この女子高校生たちはきつと何度も何度も繰り返し、玉城シゲさんの体験を読んだに違いない。存在の内奥までずたずたに引き裂かれた体験。そして「わたしの子どもを返して！」という言葉に玉城シゲさんの心の底からの願いと叫びを込めたのかもしれない。

盈進中学、高校(広島県福山市)のヒューマンライツ部…学校にヒューマンライツ部があること自体嬉しい驚きです…の生徒さんたちは「長島愛生園」で、2016年11月19日に帰天された金泰九さんとの出会いを深めてきた日々をパワーポイントで分かち合いました。金泰九さんは強制隔離の歴史、差別、偏見と闘い続けた一方、若い人たちと積極的に交流し、「語り部」としての人生を生きられた。そのパワーポイントを見ながら感じたことは、生徒さんたちは本当に大好きだった金泰九さんから大切なことを習ったんだということ、そして曾孫の様な生徒さんたちは「あんたたちが来てくれるから、私は幸せだよ」という言葉を金泰九さんの心から紡ぎだした。

最後に、非常に個人的な体験を分かち合いたいと思います。それは言葉で言い表すことが未だにできないものです。大島青松園で用意された讃岐うどんの昼食を済ませ、午後からの交流会が始まるまでの30分程の休憩時に、ある人の提案で園内にあるカトリック教会に行ってみることにしました。引き戸になっている戸を開け、中に入ると両脇に木彫りの端正な聖母マリア像とヨゼフ像がある。案内して下さった太田神父さんが木の節がシミのようになったところをきれいにしたいきさつを話してくれました。その話を聞きながら、突然、どう表現しても適切とは思えない、ザワザワ…と言えいいのかゾクゾク…というか、声が出そうになるのを必死でこらえなければならぬほどに全身で何かを感じたのです。言葉にならないことを伝える術もなく午後のプログラムへと急ぐしかありませんでした。



青松園のマリア像

前述した沢知恵さんが、礼拝が行われなくなった礼拝堂の掃除をしながら、「アッ！…さん」そして別の方に掃除機をかけながら「アッ！…さん！」と感じて…一人ででも礼拝を続けることを決心されたことを聞いた時、私は、ああ、これなのかも知れない…教会の、あの場で祈っていた誰かが、呼びかけているのかもしれないと思い始めたのです。そんなことなんて有り得ない、気のせいだ！と片付けてはならないように思える体験。始めは、ここに通って祈っていた人の名前を知りたいと思いました。でも、それは違うように思えます…記録されている名前、教会の洗礼台帳に書かれている名前を知ったところで、それはその人の名ではないからです。

その人は もしかしたら、国賠訴訟の原告にもならず、人権や差別に関して語ることもなく、俳句や短歌として思いを残すこともなかった人かもしれない。誰かに受け取ってもらえるような言葉もなく、存在そのもので“悶え”て、苦しみをイエスにぶつけて

いたかもしれない。その身もだえがイエスの内に祈りとなって、いのちの交応となって、意識することのできない私の存在の基層を揺さぶったのかもしれない。

いつまでも眺めていたいと思わせる穏やかな瀬戸内の海、この海も懐かしい故郷、思い焦がれる人々に自由に会いに行く回路を断ち切る海ならば哀苦の海であつたに違いない。

この海は日本が“近代化”を目指、国民を犠牲にしていった同時代、公害によって痛苦を生み出した水俣につながり、国家権力が強圧に民意と海を圧殺している沖縄につながり、さらにまた人間の愚行を暴き続ける福島の世界につながっている。

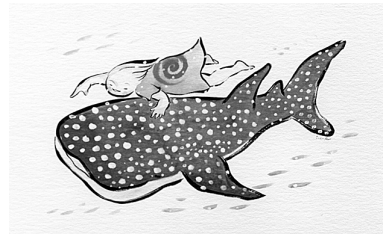
第9回対話集会

日 時：2017年1月8日~9日

場 所：大阪梅田教会 サクラファミリア

発題者：山本純子さん

コーディネーター：山村暁子さん



山本さん 地域の中に入って、妊娠した時くらいに地元で差別事件、野洲中学校連続差別事件というのがあって、中学校の現場で差別落書きが多発したんです。地域の生徒の上靴がなくなって、出てきたら差別語が落書きされていたり、黒板に差別落書きがあったり、地域の子どものたちの学習机にも差別落書きがあって、中学校にうちの村の子が何人か通っていて、部落の子の持ち物に集中して落書きが多発したんです。上靴や教科書もなくなって、出てこなかったりとか、上靴は出てきたら落書きがあったりとか、そういう事件がすごく起こりました。学級日誌もなくなって出てきたら、そこに凄い差別落書きがあって、地域の子どものたちの名指しであったりとか、ほんまに挑発的な言葉がいっぱい書かれていたりとか、今までは「死ね」という落書きがあったりとか、「死ね」から「○月○日に殺す」みたいに予告をするような落書きも見つかっています。落書きも学級日誌のそれは書いた物じゃなくて、新聞とか雑誌の文字一文字ずつを切り貼りして言葉につなげた落書きでした。地域の子どもたちは勿論、親たちも必死で、それに向かって行きました。子どもたちは、いつ、自分の物がなくなって落書きされるか分からんという不安もあるし、それが「死ね！」から「殺す！」になった時、親はどうやって子どもの命を守ろうかって、うちはお弁当だったんですが、お弁当に毒もられたらどうしようって、弁当箱を新聞紙で包んで誰かが開けたら、すぐ分かるようにしていたり、朝持って行って昼ま

での間に何かあっても困るというので、お弁当をみんなで総合センターに持ち寄って、時間の直前に持って行ったり、でも、親が直接に学校に出入りするようになると、それも周りから何か言われないうことで、センターの職員さんが集めて、直接渡したりとか、子どもたちの命を守るために必死に親もなつたんです。

子どもらも子どもらでどうして何でこんな事が起こるのかと不安だったし、その頃、広島尾道でも同じような事件があつて、それを乗り越えた子供たちがいるので、その子どもたちと交流しようということで、行ったのです。それが12月24日、クリスマスの日、学校が終わって、その足でバスを借りて、夜遅くなるけれど、そのまま広島まで行ったのです。私は、そんなこと知らなくて、夫が同和対策の担当の仕事をしていたので行くと言って、「車で子どもたちについて広島に行くし、クリスマス日は居ひんわ」って言われたのです。その時まだ新婚だったのでね、「エッ、クリスマスやのになんで居ひんの？」って言ったら、ガツンと怒られましてね。「今、中学生の子どもらがどんな気持ちでいると思うんや、世間は楽しいクリスマスや言うて、冬休みに入る言うて浮かれている時に、この子らがどんな思いで広島まで行くと思うてんのや！」って叱られたのですね。確かにそうやなって思うて、そこで広島の子どもたちと交流して、「差別はな、される方が悪いんちゃうで、差別はする方が100%悪いんや、あんた等は悪くないんやって、もし今度なんかあつたら、私らが広島から野洲まで応援に行つたるから、がんばれ！」って、広島の子どもらに励ましてもらつて帰つて来たのですね。帰つて来て、その中学生の子どもたちが何したかいうと、今までとは違つて自信もつけて、自分らが悪いんと違つて堂々としていようと、こんなことをする犯人が許せないから犯人探しすると言って、犯人探しもしたのですね。それがまだまだ続いていて、そこで全校集会を持つということになって、2月にあつたのですが、私はまだその時は子どもも生まれてないし、中学校の子どもも知らないんですけど、仕事を休んで中学校まで行ったのですよ。そこには地域の保護者は勿論、教育委員会の関係者もみんな応援に来ていて、子どもたちがどんな集会を持つのだろうかというので、それまでも大変だったらしいです。いろんな妨害もあつたけれども、地域の中学生の代表何人かが全校生徒を前に、今、学校でこんなことが起こっているんやっていうことを伝えて、自分達はこれに負けへんし、差別をなくすためにみんな仲間になって欲しいんや、差別をなくす仲間になって欲しいって訴えたのですよ。犯人捜しは、もうしない、犯人捜しするよりもっと大事なことは差別を無くす仲間を増やす事だからって言ったのを、私横で聞いていて、びっくりしたのですよね。何で！こんなことをする犯人って、悔しいやろ、憎いやろって思うのだけど、それよりも大事なことは差別を無くす仲間を増やすことだつて中学生の子が言つて、それにびっくりして感動したことを覚えています。目の前に差別事件が起こつて、突きつけられて、親たちが子ど

もたちを守るために必死になってやって行っている姿を見て、私も子どもが生まれるし、このお母さんたちと頑張っ行って行かなきゃって思いました。

実際に子どもが生まれて、保護者会に入れてもらって話した時に、結婚の時のことは長い間話せなかったんです。でも何かの時に「お互い、自分の思いを喋ろう」って、お母さんたちが自分の結婚の時の話をしてくれました。それ聞いて、今までそんな話していなかったけど、みんないろんな思い抱えて結婚してきたんだなあって思ったし、敢えてここで話さなくても、みんなもそんな思いを抱えてるんだっていうことが分かったら繋がれるなあって思ったんです。

結婚の時にしんどい思いをし、反対されて親元と全然行き来のない人もいたし、逆に地域で生まれ育って来たお母さんたちにしたら、子どもの時から抱いていた差別のことを話してくれたし、一人一人の全部を聞かなくても、ここに集まっているみんなはいろんな思いを抱えているから、その事を思ったら繋がれると思えたし、何よりも「子どもにこんなしんどい思いさせたくないなあ」っていう思いは共通だなあって思ったんです。地域で生まれ育ったお母さんたちと、小さい時、差別なんか知らなくて、のほほんとしてきた私たちとはやはり違うという所があって、地域で生まれ育ったお母さんたちにしたら、ポッと入って来て差別のことなんか何も分からへんやろ！みたいなふうに言われたこともあるんです。確かに子どもの時から差別にあって、しんどい思いして来てるお母さんたちと、子どもの時には全然そんな経験して来なかったけれども、そやけど結婚の時にスムーズに行ったケースばかりじゃないぞう！って思って、そんな事で親同士が壁作るんじゃないって「子どもにはこんなしんどい思いさせたくない！」っていう思いは、どの親も一緒だっていう思い、そんな部分で繋がれたらいいのにつて、保護者会の中でも思ったり感じたりしたことがあります。

山村さん 他所の人として地域の中に入って行くという、結婚が終わった後に生活が続いて行くわけで、その中で折り合いをつけていくという、入って行く立場からしたら、その辺が難しいのではないかと。私の母親をみていても、そんなふうに思いました。ただ、そこに住んでいる父親にしたら、受け入れる方も大変なのかもしれません。同じ思い、同じ経験をしていなくても気持ち、共感できる部分があったり、部落差別があるがためにしんどい経験をしているというのは、出身者、非出身者関係なしにあって、差別があるために理不尽な思いをした、そしてそれに抗う気持ちを持ったことで繋がれるということをお話してもらったのかなあとと思います。

今のは純子さんの場合はそうでしたよということで聞いて頂けたらいいかなと思います。

山村さん 今、差別事件のこと言ってくれたんですけど、野洲中学校という所で連続差別事件が起こったんですよね。その概要を。

山本さん 秋11月くらいから起こったのが始まりで、ケースとしては50件近くが2月くらいまでずっと続いています。「殺す！」という予告があったのが1月31日で、そこまではみんなピリピリした感じでした。1988年ですね。

山村さん エッ！そんな最近なんですか？昔の話や思うてました。

野洲で殺人事件がありましたでしょ？それはもっと前？

山本さん それは私が高校生の時で、それも差別が含まれていますね。連続差別事件は1988年で、50件くらい、もうずっと続いて行くんです、毎日のように。

山村さん 相手は？

山本さん 部落の子ばかりです。部落の子が何人かいるじゃないですか、一年生から始まって三年生に、二年生はとんでいるんですよ。だから、二年生の子もいつ、自分に来るのかという不安はすごく持っていました。当時の子どもたちからも聞いていますし、いつ自分が狙われるんかなって。上靴がなくなって出てきたら、バンツと差別語が書いてあって、それはもう履けないじゃないですか、親は新しいのを買ってと思ってたんだけど、(子どもたちは)いや、学校にある古いのを借りてそれで卒業まで行くと、後わずか3カ月ほどだし、新しいのを買っていると、なんでや！みたいになって、また注目集めるのも嫌だし、そのままで行くと言って、学校の古いのを借りてそのまま卒業式を迎えたんだと思います。2月25日のが集会で立ち上がって、全校集会で話をして行くんですが、卒業式の答辞とは別個に卒業アピールをして卒業して行きましたね。でも、その後差別落書き事件が無くなったかという、そうではなくて、新年度に入ってからでも、地域の子対象というわけではないけれども差別落書きは続いて行きました。犯人としては分からずじまいです。犯人探しをしていた時は、夜に子どもたちも隠れていて、誰かが入って来たら見つけようとしていたり、学校の先生たちも巡回の班を決めて何時に全体を回って、次に何時になって回ってみると構内のいろんな所にも落書きがあったりとかで、見回りもしたんだけど、何時の見回りの時には無かったのに、何時の時には落書きが発見されたりで、学校の内部のことだから、学校の誰かがいるわけなんだけれども、そういう部分でも疑心暗鬼になりますよね。これは生徒がやっているのか、先生がやっているのか、それも結局は分からなかったんです。地域としてもすごく大きな事件でした。それをきっかけに学校教育の現場をもういっぺん見直そうということで、同和教育の見直しを野洲市としては行ったという経緯はあります。私がそこで学んだのは、子ども達の立ち上がりですよ。

自分たちが差別に怯えるだけでなく、差別を無くそうとする友達や仲間を増やしていくことが大事なんだって、子どもたちが気づいて立ち上がって行ったということが、この事件のプラスの成果だったかなと思います。子どもたちにはすごい傷になって残っています、もう大人になって、お母ちゃんになっていますけれど、中学

校で頑張っって立場宣言もして行っただけでも、高校になったらまた言えなくなっって、中学校では仲間もできたし、先生も護っってくれた。でも高校に行ったら、知らない友達がいっぱいいる中で、また新たに差別発言とかも受けてきているし、そうなら怖くて言えない、部落を名乗れないっって子もいたし、勤めて職場に行っってからでも地域の名前が名乗れなかつた。自分は中学校の時一生懸命やっって、頑張っって立場宣言もして、名乗れると思っっていたけど、やっぱり社会に出たら、それ以上のプレッシャーがあっっって、名乗れなかつたれ時期もいっぱいあつたんだっって、大人になっってから話っしてくれた子もいます。

山村さん 差別をする人はいるけれども差別をしない人もいる。しない人とつながらんということ、中学生で見抜いていたのですね。私は大人になるまで分かりませんでした。中学生の時、差別事件があつたけど地域の人の支援とか先生の支援とか、そういうのがあつたから、そういう結論に辿りついたということが、今の話で絶対に忘れてはならないポイントだと思っんです。その後、高校とか社会に出た時に、そういう味方が居なかつたら、また元に戻っってしまったという経験をしているマイノリティの子の方がとても多いと思っんです。中学校では護られているけど、護られない高校、大学に行っってしまったり、それによっってまた一歩進んだけど、また戻っってしまった、その繰り返しですっつと過ごしていくという人の方がとても多いと思っいます。その中で「何してんね、頑張れ！」言えるものではないですね。隣にいて伴走、一緒に歩いて行こうっっていうのが、その人によっっての推進力になるんじゃないかなと思っいました。「頑張れ！」っって言うんじゃないくて隣にいて、一緒に歩いて行くという、肩に手を置いてあげるといっような関係っっていうのが、本当は差別を無くすのにとっても力になるんじゃないかな、今そんな話をしてくれたんじゃないかなと思っいます。

山村さん 打ち合わせで、こういう話はしますと聞いていたんですが、ちょっと生々しかつたかも知れません。しかしあつたことを無いように、して行っただから部落差別を助長してきたという側面はあるので。他の差別でもそうですけど。差別問題を語る時に他の先進国でもそういう所があると思っんですけど、タブー視されているものがあるという課題があります。「その話はいいじゃやないか！」と、とかく避けがちということはある。そういう風に避けている限りはなくならんない、仲間もできないなあということを一曰目のまとめとして、課題提起させたいと思っいます。明日、個人の立場で何ができるかという所まで持っって行きたいです。

二曰目：

山村さん 昨日聞こうと思っって聞けなかつた部分、親の立場として自分と子どもとの関わりがどうかという部分の話をして頂きたいなあと思っいます。子どもさんができて、

親として同和教育にどういう風に関わるか、自分の子どもに部落出身であることを伝えるとかね、やっぱり親になったら、その辺の“どうしよう！”という部分が出てくるんですよね。子どもたちの人権教育、子どもたちが自分たちの立場を理解する同和教育を受けていくことについても、親によっては受けさせるか受けさせないか、その選択というのは、地域出身の親やったら出てくるところではあります。その辺のことを話して頂きたいなあと思います。

山本さん 私の連れ合いのお父さん、お舅さんになるのかな、その方は、私が連れ合いと出会う前に亡くなっておられたので、私は直接は知らないんです。だけど地域の支部を立ち上げて、改良事業とかに関わった方で地域の中では一目置かれていたんです。その息子ということもあったし、いろんな方に教えて頂いて、連れ合いも解放運動というのを知って行ったんです。そういう家庭やったので、家の中で部落とか差別の話や日常会話の中で出てくるんです。毎日、毎日そんなこと話しませんけどね。話さないけど、別に隠す必要はないので、そういう話を聞いたり、お姑さん、おばあちゃんも他所の部落から嫁いで来ている人なので、自分が育ってきた部落の話とかも私に教えてくれたり、そういう話を聞きながら子どもたちも育っています。多分、“部落ってというのが何や？”とか“差別が何や？”とかいうことは小さい子には分からなかったかも知れないけれども、自然とこういう話を聞いて行っているんです。私もそういうことを、おばあちゃんの話や聞きながら学んで行くという仕方だったし、啓発ビデオとかを見ていて、子どもがまだ小さい3歳くらいだったかな、「ちゃべつって何や？」みたいなことをつぶやきながら寝ているんですね。一緒にお風呂に入った時も、石川一雄さんの狭山の歌を私がちょっと覚えようと思って歌っていると、子どももそれを聞いて覚えていたり、そんな感じの家庭だったんです。保育園に行って、保育園から小学校に上がる時に地域の子ども会に入って行くんですけど、“子ども会に何で行くの？”っていう子どもなりの疑問ですよね。“それってな～に？”みたいな。私は子どもに“子ども会って楽しいよ、行きたいなあ”って思うような仕方で子ども会を伝えたくて、“誰々ちゃんと行きや”って言っていました。“保育園のお友達もみんなそこに行くの？”って聞いて来て“いや、違うよ、ここのお友達はどどここやし、こっちの誰々ちゃんはその地域の子ども会があって、いろんなところに子ども会があるから、それぞれにあるんやで”と話をしていました。でも、他所の子ども会は、楽しいことをするお楽しみの子ども会ですよ。でも内の地域は解放子ども会であって、解放学習をしていく人権のことを学んで行く子ども会。意味合いは違うけれども、一年生の時はなかなか、そこまでの説明はできませんでした。でも、まずは「子ども会なんか行かへん！」って言われたらどうしようと思っていたので、楽しく行って欲しいと思って送り出していました。その時は私も保護者会とかでセンターに行く回数も多かったし、息子に“た

っちゃんは子ども会でいろんなこと勉強するやろ、お母さんも夜センターに行ってる
いろんなこと勉強してるねん”っていうような話をして一緒やなっていう感じで、子どもには伝えていました。

内の地域では小学校4年生になったら、ここの地域が部落ということを伝えていく
んです。立場っていうのを明らかにしていく。その時には保護者と子ども会を進
め行ってくれる先生たちと話をしながら、大抵4年生くらいで地域の学習をし
て、進めて行って3学期くらいに、そういうことをはっきりさせるみたいな仕方が、
例年はあったみたいです。けれども、4月の最初の子ども会の時にうちの子が先生
に質問したそうです。“先生、何で僕らの子ども会は毎週、毎週たくさんあるの？
他所はそんなに行ってはらへんの、何であるの？”みたいに質問した時に先生は、
そこで迷わず「部落やしや！」そんな感じでスパンと言われたんです。

けれども「ここは差別を無くそうと思って、すごく頑張っている所なんやで」って
プラスで伝えてくれたんです。それで、“アッそうか！”って子どもは納得した
みたいなんです。そこで変に隠し立てして“いや～それは、ちょっとな、もうちょ
っと勉強してからにしよ…”言われたら、子どもは聞いたらあかんことを聞いたか
な？とってしまう。その時に先生が迷わずにスパンと言ってくれたのが私はよか
ったかなと思っていますし、プラスとして伝えてくれたのはよかったかなと。

子どもは実際に帰って来て、家で「お母さん、ここはな差別を無くすために頑張っ
ている地域やねんで、先生そんなふうに教えてくれはったで」って言ってくれたん
です。それが私はすごく嬉しかったんです。「そうやな、お母さんもこの地域に
住んでいて、差別無くそう思うて、頑張っている人にもいっぱい出会えて、そうい
うお友達もできて嬉しいわ」っていう風に伝えて「だからここに住んでいてよかつ
たなって思うよ」ということを私なりに伝えました。そういう形で差別について子
ども会の中で、小学生やし難しいことは勉強できないけれども、お友達を大切にす
る、みたいな勉強から始まって行って、中学生、高校生くらいになると不合理な
ことについても話して行くこともしていました。

2番目の子が小学校の4年生の時に、学校で上靴が無くなったんです。それを私が
知ったのは夕方、先生から本人に電話があって、私がまず出たんですが、「なる君
いますか？」夕方まで仕事をしていたし、夜はまたセンターみたいな生活している
から、滅多に家にいることはないけれど、その時はたまたま家にいて電話とったん
です。なる、先生から電話やで」って渡して、何か話して電話が切れた後に聞
いたら、「あのな今日、僕の上靴が無くなってん」って言うたんです。「え～っ！」
って、私が慌てふためくのを子どもには知られたくない、見せたくな

いって思ったので、“どういうこと？もういっぺん言って”って、校外学習かなん
かで2時間目に出て行って、戻ってきた時に上靴がなくって、お友達にも探しても

らったけど無かった、出てこなかったっていう話をしたんです。「そやし、そんなこと先生がもういっぺん聞かはったんや」って言うんですね。「そうか、どっか違う所に置いちゃったのかなあ」とか言いながら、私もその場をごまかしたんだけども。その後、地域の総合センターに行って、担当の先生に出会って「うちの子の上靴が無くなったのをご存知ですか？」って聞いたら、その先生は昼から出張に出ている。「えっ！知りません」って言われて、すぐ学校に電話で連絡とって来て、やはり無かったみたいで、「先生、それはいいんやけども、担任の先生から電話がかかってきた時に私、直接先生と喋っているんです。何でそのことを親である私に言ってくれなかったんでしょうこの親が子どもの上靴が無くなったって聞いたら、どんな思いをするか分かってきていますか？野洲中学の連続差別事件のことがよみがえるんです。

今度出て来た時に上靴に何か書かれていたら、どうしよう！ってすごい不安なんです。その親の気持ちを解ってくれてはりますか？」と、その時結構きつい口調でガ〜ンと言ったのを覚えているんです。その加配の先生は状況をのみ込んでくれたんだけど、担任はそれが分かっていたんですね。無くなったのがどういう状況からかは分からないけれども、それは金曜日のことだったんで、月曜日にもういっぺん探して下さいねって言って、けれどもすごく不安なんですよということはお話ししました。月曜日に、何でこんな所にあるの？というようなところから出て来ました。幸いにも落書きはありませんでした。だから一安心はしたけれども、たぶん、隠したお友達がいるやろうし、それは私には分からないけれども、先生なら子どもの人間関係とか悩みとかを把握していると思うし、分かると思うし、先生はその子をホローして下さいねって伝えさせてもらって終わったんです。

やっぱり、上靴が無くなった時の私のすごい不安感みたいなんは、連続差別事件の時に当時の親は、私以上にもっと怖い思い、子どもに何かあったらっていう思いを持ってはったんやろなあって、私は我が子の上靴が無くなった時に、そういうことを経験しました。

山村さん 差別事件のことを昨日、割と時間を取って話してもらったんですけど、結局解決はしてないんです。誰がしたっていうことは、もういいっていうことで、子ども自身が犯人捜しはしないっていうことを言ったのは言ったけれども、学校の方も突き詰めるってことが出来なかった。

山本さん 犯人を捜してはいたんですが、結局分からずじまいということで終わってしまった。

山村さん 全校集会を開いて、こういう事件がある、何とか解決したいということを訴えかけて、収束はしていますね。根本的な解決…根本とは何かっていうこともあるんですけど、一般の差別事件が起こった時、誰がっていうところは割とはつきりし

て来るんですが、そういう部分がない状態で、でも学校としてはちゃんと教育をするということで、同和教育はその事件をきっかけにだいたい進んだということはありません。しかし社会問題として差別がまだまだ共感を得ていない状況です。何年前かに起こった差別事件がフラッシュバックして来るのが、差別事件を経験した親に実際に起こっている、グラグラした不安定な世界の中に立っている状況にあります。その話を今してもらっていました。そういう状況ではあるけれども、学校の中で人権教育がだいたい進んできたということもあると思います。

滋賀県の場合は地域によっては中学校くらいで同和教育を受けるようになっていますが、純子さんの地区の場合は、当事者の子どもは小学校の時からずっと勉強してきたけれども、それ以外の子どもは、全くさらの状態で、同じ教室の中で勉強する。その辺のことも含めて学校での人権教育のことについて話してもらっていいですか？

山本さん　うちの真ん中の子が小学校6年生くらいの時やったかな、参観日の日に人権学習をもってこられて、その時「人の値打ち」の学習で、あの詩を読んでどう思うかみたいな、あの詩を読みながら我が子は勉強してるんだけど、我が子が自分の立場をしっかりと分かって、この勉強できているかなあ、どうかなあっていう不安もありながら、参観していたのを覚えています。部落の中に他所から嫁いで来て、子どもを産んだ、その子どもは部落の子やって言われるんだろうかって一節がありますよね。それが、あなたの立場よってということが、理解できていいるかなあと思ってました。そういう勉強をしたり、中学校になると、1年生、2年生、3年生でプログラムが組んであって、1年生の1学期には、例えばですが在日のことの勉強があって、2学期は障がい者、3学期は部落問題という形で組み込まれていた。中で人権学習を積み重ねて行くんです。

実際に人権学習をするよりも前に地域の保護者と先生とで話し合いを持ちます。それまでの学習会の中でやっぱり地域の子が人権学習で下を向かなきやならないような学習は止めてくれ！っていう思いがあったんです。前向きな授業が受けられるようにしてって、今までだったら、例えば部落の人はかわいそうな立場に置かれていますみたいな授業だったら地域の子どもらは下向きしかないですよ。こういう劣悪な環境の中で育ちましたみたいな、そんな授業なんてして欲しくないですよ。親も安心して子どもが人権学習を受けられるようにと事前に話し合いをもって、学習に取り組むという形を取ってもらっています。部落差別の問題を学習するという時に、結婚差別ということを話題にしようと思っていますということ事前に聞かされた時に、学習で結婚差別の話をするよりも前に我が子には自分の親の時のことをちゃんと話しておかなければならないんじゃないかなって思ったんですよ。でもなかなかそれが、言えなくて…どうしよかなあ…迷いに迷っていたのを覚えています。でも、学校で結婚差別の話を聞いたというよりも、先にちゃんと伝えておきたいな

あと、昨日からお話ししていたような詳しい話はしていませんけれど、「亡くなったおばあちゃんは、初めは反対してやったんやで」ということを話して「そやけどなあ、あなたが生まれたことで、おばあちゃんは変わらへったんや」と、「差別をしてはったかもしれへんけど、あなたが生まれたことで部落のことを勉強しようと思って講演会に行ったり、勉強して変わって来はったんやで、あなたの存在はすごく大きかったんや」ということを、本当に簡単な言葉だけど、もう明日に人権学習が迫るといふ時に悩みに悩んで伝えたのを覚えています。その時、子どもは何にも言わなかったけど、聞いてくれました。

山村さん 結婚をする時にスムーズにいったない。昨日特に母親からの反対がすごくて、結婚した後もすごくて、それを口にするのは、母親の存在を否定してしまうんじゃないかという思いがあって、それをなかなか言えなかった事を話してもらいました。子どもに伝えるにあたって、お連れ合いさんと多分相談してはると思うんですけど、どんな感じだったんですかね？

山本さん してないんです。笑い声!!! 会話のない夫婦で…したかどうかはつきりないんです。こういう人権学習があるみたいという話はしてた覚えてと思いますし、たっちゃんに話をしとかなきゃなあっていう話はしてたと思います。具体的にどういふ話をするという相談はしてなくて、私自身の気持ちとして話したという感じですかね。本当だったら、夫婦ちゃんと揃って話せなあかんのに。

山村さん 私、親から中学校で勉強する？話聞いたかどうか覚えてないですよ。笑い声!!! ?

山本さん その時、子どもは何にも言わなかったし、今はもう忘れてると思うんですよ。

山村さん 中学校3年生で結婚差別の話…滋賀県内で学校で同和教育をやっている学校では割をプログラムに入っているんですけど。そういう前提があって、子どもたちに結婚をどう伝えようということはあったと思います。

まあ、中学校2年、3年で結婚差別と言っても多分ピンとこなかったかたかたかも知れない。ただ純子さんの場合は純子さん自身が結婚を反対されたということがあって、そうすると子どもに直接つながってくるような話ではあるので、その辺の受け止めは比較的きちんとあったのではと思います。

家庭の中で部落問題とか差別っていうのは日常的に普通に出て来たという風に言っていたんですけど、家にもよるんですが子供に出身を伝えるということについて、意見の合致ができないまま何となく話すことが出来ないという家もあれば、ちゃんと話して親からしっかりと伝えるという家もあると思います。その辺、伝えるとか伝えないということで、ヒョイとハードルを越えた感じはするんですけど。

そんなに深刻にならなかったですか？

山本さん ならなかったですね、うちの場合は。多分、他の家庭やったら、いつくらい

にしっかり伝えるかというのはあると思うんやけども、うちの場合は特に、このことは特別に隠すことでもないし、部落だからと下向くこともないし、堂々としていたらいいことだし、差別する方が悪いんだっていう考えでいたんで、隠すとか、何時伝えようと思って悩むということは大きくはなかったですね。いつ頃から子どもらが知っていたのかということは分からへんけれども、はっきり言葉として認識していくのが解放学習と相まっての小学校4年生頃かな？解放学習で習ってきたことを家で話すということはあると思うけど、家庭によってはそこがキーポイントになって来るとは思います。ずっと大人になってから知るという方もあるやろし、知って行く段階でプラスで知ることか、マイナスで知ることかということはあると思うし、上の子は最初に知った時にプラスで知っているんで、～そういう形での出会いはさせてやりたいなあと思いました。

山村さん プラスの出会いっていうことを言ってくれたんですけど、それはある程度いろいろな条件が整わないとできないと思います。保護者会があつて、親同士が連帯して子どもたちが差別を受けないようにどうしようみたいな、受け皿というか基盤がしっかりしているということがある上でのプラスの出会いなので、たまたまラッキーというのではないかと思いますね。準備がちゃんとあつての中ですので。保護者会の中で、親が子どもに伝えるのもそうですし、うちの子ほんまに分かっているのかなあとか、そんな話、を本音でしゃべれる関係性を作れましたか？特に純子さんが地域の小さいころから一緒に育ってないじゃないですか、大人になってから入って来ているので、その辺の関係性っていうのはなかなか、どういう風に作って行ったのかなって思うんですけど。

山本さん 保護者会に入った頃は子ども会って感じで、そこに解放っていう言葉をつけるかつかないかということが問題になったことがあるんです。解放子ども会ってするのか、解放っていうのは伏せといて、子ども会だけで行こうかって、私は入ったばかりで、その時はキョトンとして聞いていたんですけど、親の中にもいろんな思いがあつて、解放ってつけて欲しくないっていう親もいたし、いや、そこはちゃんと解放ってつけて学んで行かなきゃっていう親と両方あるんだな、親の戸惑いみたいななんもあるんだなということは感じてした。

結局は解放ってちゃんとつけて子どもたちに学ばせて行こうっていうことになって、親もそのつもりでいようみたいなことにはなったので、その方向で段々みんなも進んで行くようになりましてし、小学校4年生くらいで立場学習していくんですが、4年生のそこに至るまでに、1年生ではこうしよう、2年生ではああしようと、地域の中をフィールドワークして昔の地域はこうやって、改良事業（そんな難しい言葉は使わへんけども）とかがあつて、地域の人たちが運動する中でこういう風にきれいに変わってきたという学習をしたりとか、学習を積んでいくというのも学校

の先生と親とが話し合いしながら、それに向けて準備をしていく。でも学年、学年の子どもたちのカラーっていうか、人数も、家庭状況も違うので、その年の4年生の親同士で集まって、先生と親とが集まって、この4年生の子らに伝えられるかな、もうちょっと考えた方がいいかなって、4年生で伝えきれなくて5年生に持ち越した学年もあります。その時の子どもの様子を見て、その時で判断しようみたいにはなっていますね。一応基本ラインはあるけど、この子らにはまだ難しいかな、しっかり受け止めきれないかなとか、家庭の方の準備ができてないなあとか、本当に慎重に進めて行った経緯はありますね。

山村さん やっぱり、ラッキーじゃなかったですね。ものすごい準備をしていますね。地域の力、家庭の力、学校の力がちゃんと合わさらないとできないですね。学校の加配の先生から一番上の子が聞いたって言ってますけど、そういう力がある先生を学校が人事の時に配置してくれるか、ということはものすごく大きいので、その先生は条件が整った状況だったのかなと思いますね。先生によったら、「そんなこと言うたらあかん」と言うような先生もいる。

山本さん その先生はスパンと言わはったけど、そこにいた他の先生たちは「うわ〜！ どうしよう！」って思ったらしいですね。「実は〜…」みたいに家に言いに来られた。でも状況聞いたら、「大丈夫です、うちは！」って。親とじっくり相談してないのに、言ってしまったということもありましたけど、先生によっては「どうしよう〜！」みたいなのはあると思います。

山村さん 力量があるというかね、そういう先生やったと思うんですけど。

山本さん 真ん中の子は4年生で一旦学習はしたけども、でも5年生で学んだ時にまだ、よう分からなかったりして、先生4年生の時に話してるよなあって言って、5年生で学び直しをしたりとか、理解の仕方ってやはりその学年、年齢にもよるので4年生の時には4年生なりの理解の仕方、5年生になったら、もうちょっと深まった理解の仕方があるのかなと思うし、こういうことって、一発でぼ〜んと分かるものでもないし、少しずつ、少しずつ学習を積み重ねていくことが大事なんだろうなって、真ん中の子の時はそういう風に思いましたね。

山村さん ありがとうございます。必ずしも親が伝えなくてもいい、親のような存在の人が、まあ先生であるかもしれないし、地域の人であるかもしれないし、子どもにとって一番心を開ける人によって伝えられたらいいのかなって思いますね。

私の家庭の話になると、私の親は、親が伝えなあかんとは思っていたみたいです。それはうちの考え方なんですけど、子どもとちゃんと関係性を作れる大人がいて、その人が伝えることが出来たら、そのまますんなり行くのかなって思います。それが、親でない場合もたくさんあると思いますし…

山本さん うちの子も、そんなふうに質問を出してきて、「ああ、そういえば、前そん

なこと言ってたよな」みたいな感じで受け止めて、それまでの中に土壌みたいなのは持っていたので、だから先生の言葉がスッと受け入れられたのかなって。

山村さん それまでに、幼児教育の段階を積み重ねていますもんね。地域の中の解放子ども会にも何となく親に連れられて行ったりとか、フィールドワークに親が行くからついて行くとか、小さい時で全然覚えてないんですけど、積み重ねで受け止められる力になって行くんですね。

山本さん 上の子が1年か2年くらいの時に地域での文化祭に石川一雄さんが来てくれて、狭山のことも小学生なりにやから簡単にやと思うんですけど、石川一雄さんに花束渡してました。やっぱり、それなりのはっきりとしたのは無くても、差別っていうことについて少しずつ学習して積んで行っていたので…

山村さん 感受性の部分でということですよ。そういう入念な取り組みがあった上で、立場を受け入れられたのかなって思います。そうじゃないと中々すぐには難しいですね。でもそれって、小さい頃からしなければならぬっていうことでもなくて、大人になってからでも気がついてから、自分のことを知りたいとか、もっと知りたいとかで学んで行けますので、年齢とかが全てではなくて、気がついた時から始めるということなのかなって思います。時間はかかりますけどね。

地区の子どもたちだって、早くて小学校で受け入れるまでに10何年かかっていますよね。それくらいかかるんですね。今、親としてのことをいっぱい喋っていたんですけど、最後に一言お願いします

山本さん 私もこういう機会を与えて頂いて、ほんまに、私みたいな者が話して役に立つのかなあって思っていたんです。私としては逆に皆さんのいろんな思いとか、活動されていることとかの話聞かせて頂いて、私も本当に勉強になりました。

山村さん 対話集会らしくなりましたね、今年は。(笑い声)

タイトル通りのことができてよかったなあと思っています。純子さんと皆さんが協力関係を作ってくれたから、皆さん部落関係者に無事になれたということで、よかったなあ。ほんまに学習、研修というのは聞く側と発信する側の協力がないと学びにならないと、この二日間を通して分らせて頂きました。

Atsuhiko
La Casa
107-944-2-2
Human
Rights



はしやき過ぎ、
ダメ……？

……意味かなう？

#44 夏休み前に…!?

どうしたの？

あ、せんせー。

このポスターの何が言いたいかなあ？

職員室
長門……

1

えー……!!

これは、夏休みに
はしやいだら被害に
遭うから気を付けろ。
つてポスターだねえ。

3

えーと……

発行は、内閣府
と警察庁か……
援助交際、出会い系
JKビジネス、ストー
カー、ポルノ、
ドラッグ……

2

だっ、振り込め
詐欺とか……

何でも
かんども
一緒にしちゃ
ダメ
でしょ！

いじめなんかも
書いてるよ？

4



2017.8. Zuo.

第 10 回対話集会

日時：2018年1月7日（日）13時～
8日（祭）12時30分

場所：大阪梅田教会サクラファミリアー

講師：山崎真由子さん

プロフィール

豊郷隣保館（滋賀県）に勤務。「隣保館は人が集まってナンボ」をモットーに、人権の視点で「出会いと交流」を仕組む事業を展開している。また、「特定非営利法人ヒューマンネット滋賀」を立ち上げ、NPO 法人の活動を通じて、差別の現実と向き合う日々を過ごしている。



参加費：10000円（宿泊・交流会）・3000円（交流会参加）・500円（集会のみ）

キリトリ

2017年度第10回対話集会 申 込 書

名前		
住所	〒	
連絡先	TEL	FAX
	E-mail	

参加費：10000円（宿泊・交流会）・3000円（交流会参加）・500円（集会のみ）
（参加部分を○して下さい）

申込締切は12月10日

連絡先：カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター

京都市中京区河原町三条上るカトリック会館7F TEL / FAX 075 - 223 - 2291